様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 4 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０２７２
研究課題名（和文）オースティンを中心とした 18 世紀後半～19 世紀初頭の英国小説の歴史的・文化的研究
研究課題名（英文）Historical and Cultural Context in British Novels from the Latter Half of the Eighteenth Century to the Early Nineteenth Century, Focusing on Jane Austen
研究代表者
武井　暁子（TAKEI AKIKO）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：00403634

研究成果の概要（和文）：本研究は、18 世紀前半の植民地の形成から 1820 年の摂政時代までのイギリスの歴史の流れを時系列的に検証し、しかる後に、ジェイン・オースティンを中心とする 18 世紀後半から 19 世紀初頭におけるイギリス小説を歴史的及び文化的視点から考察し、複合的視野からテクストの読解を目的とした。この時代のイギリス文化の影響を明らかにするために、インド、アメリカの文学作品の研究も行った。

研究成果の概要（英文）：This research aims to examine the periods from the early eighteenth century to the Regency, when overseas colonies were established and Great Britain gained its national strength. Thereby, focusing on Jane Austen, British novels written in those days were historically and culturally studied from the manifold viewpoints. Additionally, to clarify the influence of British culture, Indian and American novels were read.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：イギリス小説、歴史、18 世紀、19 世紀

１．研究開始当初の背景

ジェイン・オースティン(Jane Austen, 1775-1817、以下 JA と略記)の作品と歴史及び文化との関連を論じた研究書は数多く刊行されている。代表的なものを挙げるのは至難の業であるが、研究代表者が過去に読んだものの中では、刊行順に Warren Roberts, *Jane Austen and the French Revolution* (1979); Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (1987); Roger Sales, *Jane Austen and Representations of Regency England* (1994); You-me Park and Rajeswari Sunder Rajan, *The Postcolonial Jane Austen* (2000)などが、示唆に富む。Roberts の研究書は、題名の通り、フランス革命が JA に及ぼした影響について論じたものである。従来、JA 作品には歴史的事件への言及は皆無であり、JA は変動する時代とは無縁の平和な田舎の共同体の出来事を淡々と書いた、というのが定説であったが、Roberts により、JA は時代の変動に無関心だったのは誤りで、むしろ鋭敏な歴史感覚を持っており、

作品を丹念に読めば、歴史的事件への言及がきちんと書き込まれている、というのが JA 研究の定説になった。例えば、*Northanger Abbey*(1818)は JA の時代に流行したゴシック小説のパロディとの解釈が長きにわたって受け入れられてきたが、Roberts はゴシック小説に登場する悪漢は専制君主、迫害されると淑女は国民、人里離れた廃墟は政治犯を投獄する刑務所の表象である等の読みを提示し、JA 研究において新たな流れを作った。
Butler の研究は、Roberts の研究を一歩推し進めたものである。フランス革命勃発前後の政治思想の 2 大主流である保守主義と急進主義について考察し、JA や JA が影響を受けた William Godwin(1756-1836), Mary Wollstonecraft(1759-97), Hannah More(1745-1833)らの作品を保守主義と急進主義のパラダイムで論じている。
Sales の研究は、Roberts や Butler などが取り上げなかった摂政時代の文化風土を綿密に分析し、JA 作品の中では後期に属する *Mansfield Park*(1814), *Emma*(1815), *Persuasion*(1818), *Sanditon*(未完)などに登場する家庭演劇、海岸保養地、郵便制度、中流階級における旅行の流行を摂政期の文化的爛熟と関連させつつ論じている。
JA と、イギリスが建設した植民地と現地における奴隷制との関連は Edward Said の論文”Jane Austen and the Empire”(1993)以来、JA 研究における重要なテーマである。Park and Rajan の研究書は、JA と植民地、奴隷制について論じた 1 冊の研究書としては最初のもので、JA の時代の植民地情勢について新しい情報を提供しつつ、*Mansfield Park*, *Persuasion* を中心に JA 作品を論じている。

２．研究の目的
本研究の特徴は、上記に言及した Roberts, Butler, Sales, Park and Rajan ら、個々の研究を統合の上、さらに発展させ、文学テクストとテクストが書かれた時代の歴史・文化的風土との関連に新しい読みを提供することにある。具体的には、第 1 次資料を参照しつつ、JA を中心に 18 世紀後半から 19 世紀初頭におけるイギリス小説を歴史的及び文化的風土と関連させつつ分析・考察することによって、植民地の発展→アメリカ合衆国独立、フランス革命→奴隷制→女性の政治活動参入→摂政時代における中流階級の富の蓄積と消費、文化的爛熟に至るまでのダイナミズムが同時代の文学作品に多大な影響を及ぼしていることを明らかにし、文学、歴史、文化を横断し、複合的な視野からテクストの読解を行う。文学理論的に言うと、文学作品は依拠するべき歴史・文化風土を除いては、真の理解はありえず、文学テクストは歴史文化的ディスコースを再生産する装置なのである。
JA の作品に重点を置く第 1 の理由は、JA の生きた 18 世紀後半から 19 世紀初頭は海外植民地の拡大、アメリカ合衆国独立、フランス革命、ナポレオンとの戦争など、重要な歴史的事件が相次ぎ、産業革命などもあって、国力の増大と共に、社会・経済構造が激変し、従来の価値観がゆらいでいた時期である。上記に言及した Roberts, Butler, Sales, Park and Rajan らはこれらの歴史的出来事と JA 作品への影響を論じ、各自優れた論考を展開しているが、1 つの歴史的事件が新たな歴史的事件の契機になり、それが繰り返されて歴史が築かれることを考慮せず、いわば包括的視点に欠けていた。本研究で、JA の生涯、JA に影響を与えた文学作品、歴史文化風土の関連を総合的に論じることによって、文学と歴史の連続性について新たな考察が可能になる。
第 2 の理由としては、JA 作品と植民地の関連については、Said, Park and Rajan, Moira Ferguson などが論じており、ポストコロニアリズム研究隆盛の一因ともなっている。しかし、JA 自身と植民地の関連については、JA の叔母が結婚相手を探すために単身インドに渡ったこと、JA の父親が植民地の管理人として名義を貸していたこと、JA の兄弟が海軍軍人でバミューダ島、西インド諸島等に赴任した事実は伝記に記載されているものの、これらの事実について、例えば当時の植民地管理や海軍の実態については、JA を取り扱った論文や研究書では Brian Southam, *Jane Austen and the Navy*(2000)を除くと、詳しく論じたものはほとんどない。また、JA 生存中から活発に行われた奴隷制廃止運動で重要な役割を果たした Thomas Clarkson(1760-1846)の著作を JA が読んでいたことは書簡から明らかだが、Clarkson と JA 作品との影響については JA の専門学会としては世界最大の北米 JA 協会(Jane Austen Society of North America, 以下 JASNA と略記)の論集 *Persuasions* ですら、論じているものは非常に少ない。だが、奴隷制廃止運動は Butler を借りると当時の急進主義者たち、有名なところでは Clarkson の他 Godwin, Wollstonecraft が精力的に推進し、William Blake(1757-1827)の作品にも影響が見られる運動であった。本研究では、これらの作家たちの奴隷制廃止運動への関わりと著作を読解し、JA との影響を論じることによって、限られた作品論に終始していた JA と奴隷制との関連に新たな事実を提供する。

３．研究の方法
本研究を遂行する具体的な方法は、①JA 及び他の作家における軍隊、植民地、アメリカ合衆国独立、フランス革命、摂政時代の風俗の

データの抽出・整理、②植民地経営の実態、軍隊の実情、奴隷制廃止運動の歴史の資料収集と整理、③摂政期の風俗と文化風土に関する資料収集と整理を3年間に渡って行い、収集した第1次資料に依拠し、テクスト解読を行った。軍隊や奴隷制廃止運動の第1次資料収集のために、British Library, National Maritime Museum, International Slavery Museum, Merseyside Maritime Museum等に出張した。

(1)2010年度
JA作品における軍隊、植民地、アメリカ合衆国独立、フランス革命、摂政時代の風俗のデータの抽出・整理
前述したRoberts, Butler, Sales, Park and Rajanらの研究により、JA作品における軍隊、植民地、フランス革命、摂政時代に関する言説は当時の政治状況と文化風土を反映していることは明らかになりつつあるが、軍隊制度の誕生→植民地の拡大→アメリカ合衆国独立→フランス革命→国力の増大→中流階級の富の蓄積→階級社会の再構成→摂政時代の文化的爛熟までを一貫して俯瞰し、JA作品を論じたものはなかった。そこで本研究では、習作から*Sanditon*にいたるまでオースティンの全テクストを精査し、上にあげた歴史的事実への言及を抽出して、整理した。
上記と並行し、JAの伝記として最新かつ決定版との評価が高いDeirdre Le Faye, *A Chronology of Jane Austen and Her Family*(2006)を中心にJAの伝記を再読し、JAと植民地との関連において、特に従来あまり論じられていなかった事例を中心にデータを収集・整理した。
2010年8月22日～9月6日までロンドンに出張し、大英図書館等において資料収集を行った。
上記に加え、当初Godwin、Wollstonecraft、Blake, Moreらの奴隷制廃止運動への関わりと作品における影響のデータ抽出・整理を行い、従来看過されてきた18世紀の著名な文学者と奴隷制廃止運動について検証する予定であったが、時間不足等の理由で実現できなかった。今後、他の研究と関連付けて再実行したい。

(2)2011年度
植民地経営の実態、軍隊の実情、奴隷制廃止運動の資料収集と整理
研究目的で述べたとおり、JA自身と植民地の関連については、いくつかの伝記的事実が知られているものの、例えば当時の植民地管理や軍隊の実態については、JAを取り扱った論文や研究書ではほとんど言及されていない。まず、軍隊の実態については、Brian Southam, *Jane Austen and the Navy*(2000)を再読し、JA一家と海軍との関連について調査し、海軍の実態、さらに植民地の拡大の過程と経営の実態について情報収集することから始めた。陸軍については、海軍との関連から資料収集を行った。
植民地拡大の影の部分ともいうべき、奴隷制廃止運動については、まずJA生存中から活発に行われた奴隷制廃止運動で重要な役割を果たしたThomas Clarkson(1760-1846)の著作を読み、ClarksonとJA, 特に*Mansfield Park*への影響を考察することから始めた。JAのヒロインの中でも特に理解が難しいといわれる*Mansfield Park*のFanny Priceについて、ClarksonとJAの影響関係を証明することによって、ポストコロニアル批評において”slave,” “negro”と形容されるFannyの人物設定に関して新しい考察を試みた。奴隷制廃止運動については、Clarksonの他に、運動の代名詞でもあり最も著名なWilliam Wilberforce(1759-1833)の著作を読んだ。
奴隷貿易の成立からヨーロッパ大陸での奴隷貿易の拡大については、Eric Williams, *Capitalism and Slavery* (1944),Kenneth Morgan, *Slavery and the British Empire* (2007)などの新旧の定評ある研究書を読んだ。それによって、18世紀後半から19世紀初めにかけての、イギリスの奴隷貿易を広義の歴史的文脈で理解することができた。イギリスの海外植民地拡大の上で原動力となった海軍については、Brian Lavery, *Nelson’s Navy: The Ships, Men and Organisation 1793-1815* (1989); Peter Goodwin, *Nelson’s Victory: 101 Questions & Answers about HMS Victory Nelson’s Flagship at Trafalgar 1805* (2004)から詳細な情報を得た。その延長で、オースティン以降のイギリス本国とインドの関連についても考察した。
2012年3月12日～20日までイギリスに出張し、大英図書館等で資料収集を行った。

(3)2012年度
本研究の最終年度にあたるこの年度においては、Sales等を再読し摂政時代の風俗について情報整理を行うことと、22-23年度の研究のまとめを中心に行った。具体的には、JAを中軸として、他の18世紀前半から19世紀初頭の主要なイギリス文学作品を植民地拡大によりイギリスの国力が増大し、中流階級の富が蓄積されたおかげで、伝統的な階級社会が解体し再構成されるまでの過程に沿って読み直し、文学テクスト、歴史、文化の相関関係を明確にした。
この研究を進める過程で植民地拡大とともにイギリス発展の原動力となった産業革命にも興味を持ち、産業革命の進展と中流階級が社会の中心となった歴史的過程の相関性を検証した。さらに、当時のイギリス文化が

及ぼした影響の一例として、アメリカでのイギリス小説の読まれ方についても論考を行った。

４．研究成果

(1)2010 年度

成果は主に学会発表 2 件において公開した。1 件は 7 月に開催された日本オースティン協会シンポジウム「ジェイン・オースティンが書いたイギリス―再読で浮かび上がる変動の時代」で司会・講師を務め、「奴隷貿易――ファニーとジェインの口の端にのぼるとき」と題する発表を行った。内容は、1813 年 1 月 24 日付のオースティンの書簡の一節、「私はチョートン読書会から借りた、陸軍工兵隊大尉チャールズ・ペイズリー著、『大英帝国の軍事政策と機構に関するエッセイ』の八折版を読んでいます(中略)この本に私は最初異議を唱えましたが、試に読んでみたところ、とても楽しく面白く書かれているとわかりました。私はクラークソンやブキャナン、もしくはロンドンの二人のスミス氏と同じくらい、ペイズリーが好きです。私は兵隊に初めて憧れました。でも、ペイズリーは本当に並外れた力と熱意で書いているのです」という部分を導入とし、ここで言及されている奴隷貿易廃止運動家トマス・クラークソン(Thomas Clarkson, 1760-1846)と陸軍軍人チャールズ・ペイズリー(Charles Pasley, 1780-1861)が共に目指したものは、立場を異にしながらも、植民地の維持と正しいモラルであったことを説明した。

オースティン作品中、奴隷貿易について口にするのは、ファニー・プライスとジェイン・フェアファクス(Jane Fairfax)の二人だ。しかし、ファニーの発言は、バートラム家全員の沈黙により黙殺され、ジェインのそれは、エルトン夫人(Mrs Elton)の「サクリング氏(Mr Suckling)は奴隷貿易廃止支持者なんですのよ」という頓珍漢な応答によって、強引に方向転換させられる。先の書簡でのオースティンのペイズリーへの傾倒と合わせて考えると、ファニーとジェインに対する周囲の反応は、当時のイギリス中産階級が植民地における奴隷の人権に関心を持つ一方、国の発展のためには植民地の拡大及び植民地での労働力―奴隷は絶対必要だ、という矛盾した認識を持ち、しかもそれを直視することを忌避していたことを示すものだと結論づけた。

もう 1 件は 10 月に開催された北米 JA 協会の年次大会で、”The Art of Lying and Fiction-Making in *Northanger Abbey*”と題する発表を行った。内容は、摂政時代に中流階級の富の蓄積の副産物として、温泉保養地への旅行が流行したことがこの作品の時代背景にあることを明らかにした上で、この作品の中心舞台であるバースに集う人々が古い家柄と先祖伝来の地所を持つ地主から小金をためて一段上の階層に少しでも近づくことをもくろむ新興成金までさまざまな社会階層に拡大していることを論じ、彼らに共通する生態が自己喧伝のための消費と虚言であり、一見強固に見える階級間格差が曖昧になりつつあることを論じた。

さらに、JA 作品を読み進めるうちに、イギリスの主要な植民地の一つであったインドの中産階級に興味を持ち、ヴィクラム・セート『婿探し』(1994)と JA 作品の類似性について考察した。

(2)2011 年度

研究成果は、2010 年度の学会発表や論考を基に①「*A Suitable Boy*---ラタは”suitable”な伴侶を選んだのか？」,『現代インド英語小説の世界―グローバリズムを超えて』(鳳書房, 2011, 77-94 頁)と②「奴隷貿易――ファニーとジェインの口の端にのぼるとき」, *Seijo English Monographs* 43 (2012): 187-216 にまとめた。

①では、JA が描く 19 世紀初めのイギリスとセートが描く独立後のインドの中産階級において、女性が自活するための手段がなく、結婚しか将来の選択肢がないことは共通しているが、セート作品のインドにおいて、限られた数の富裕層の関心はいかにイギリス本国の上流階級を真似るかに向けられており、イギリス上流階級に輪をかけて権威主義的かつ閉鎖的であり、なおかつヒンズー教とイスラム教の対立や個人より家族を優先する価値観といったインド特有の文化風土もあいまって、『婿探し』は JA 作品より一段と複雑な作品であるとの結論だ。

②では、2010 年度の学会発表に奴隷貿易の始まりからイギリスでの奴隷貿易の始まりと植民地建設、1807 年の奴隷貿易廃止法制定にいたるまでの歴史的背景を詳細に分析し、ファニーとジェインの奴隷貿易への発言は会話として発展せず、不完全燃焼な感があるのは、イギリスでは奴隷貿易廃止法が成立したにも関わらず、奴隷は植民地へと売られ続け、奴隷の過酷な状況は変わらなかった、ということと対応するものであることと、ファニーとジェインが自らの人生設計に関して決定権がなく、自力で苦境を打開できないことは、従来オースティンの時代の女性の地位の低さの典型と解釈されてきたが、奴隷貿易廃止運動のコンテクストで読むと、奴隷の無力さを表すものでもあり、だからこそ未遂にされたファニーとジェインの発言は、奴隷貿易廃止運動が抱える根本的な矛盾の縮図であるとの論旨だ。

奴隷貿易廃止運動の意義について振り返ると、奴隷の人権は当時革新的な発想だったが、奴隷貿易廃止運動は遅々として進まなかっ

た。奴隷貿易によって得られる利益が非常に大きかったことと、フランス革命後の緊迫した政治情勢が主な原因である。クラークソンたちが、まず奴隷貿易廃止だけを行い、奴隷制廃止は後回しにする、という表面的な解決しかできなかったことにも問題がある。ファニーとジェインの発言に対する周囲の黙殺や曲解は、理念ばかりが先走り、現実がなかなか追い付かなかった奴隷貿易廃止運動の状況を体現するとの結論である。
2012 年 7 月にアメリカで開催される学会”Dickens Symposium in Lowell”での研究発表に応募し、受諾された。

(3)2012 年度
主な研究成果は次の 3 つである。まず、JA『エマ』(1816)に登場する新興成金のエルトン氏はその素性が一切明かされないものの、オースティンの時代に散見された、植民地で奴隷を搾取して富を作り、本国に引退し、悠々自適の生活を送り、奴隷制反対論者に転向する有閑紳士のパロディであり、オースティンの奴隷制への反対が表明されているとの結論を得た。この成果は英語論文としてまとめ、北米 JA 協会の機関誌に投稿予定である(締切 2013 年 8 月 1 日予定)。
次に、7 月にアメリカで開催された Dickens Symposium in Lowell において JA、ディケンズ、オルコットの作中に登場する女性を比較し、女性の経済的自立や女性らしさの定義の類似点と相違点を比較し、三者の作品では女性に対する束縛は根強いものの、時代が下がるにつれ、女性の自活や社会貢献に対する考えが変わり始めることを指摘した。ことにオルコットの作品ではイギリスの小説では否定的に描かれているガヴァネス(中産階級の家庭で住み込みで働く女性家庭教師)が肯定的に描かれるなど、女性の自活や社会貢献が評価される等の特徴があり、この 3 名の作家の時代性とイギリスとアメリカの中産階級の価値観、ひいてはイギリスとアメリカの文化風土の違いを示すものとの結論である。
最後に、海外植民地拡大とともに、イギリス経済に影響を及ぼした産業革命と土地の囲い込みが当時の文学作品にどのように描写されているか研究した。産業革命の結果、イングランド北部の町では、工場を中心とした工場町が形成され、工場町が集まると工業地帯となり、そこに人が住む。一方、農村部では 1740 年代から土地の囲い込みが加速化し、農業技術は飛躍的に向上し、生産性は上がったが、その陰で大地主と小地主の間の格差は広がった。小規模な自作農は土地を所有できなくなり、父祖伝来の土地を離れ、都市に流入した。住人がいなくなり、荒れ果てた農村の様は例えば、オリヴァー・ゴールドスミス『寒村行』(1770)に見ることができる。この研究成果は 2013 年夏刊行の共著に掲載する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①武井暁子，「奴隷貿易――ファニーとジェインの口の端にのぼるとき」*Seijo English Monographs* 43，査読無，2012，187-216

〔学会発表〕（計 3 件）
① Takei, Akiko(武井暁子)，“Alcott's Rewriting of Dickens in *Little Women*” Dickens Symposium in Lowell，事前審査有，2012.7.15，Lowell，MA，USA

②Takei, Akiko(武井暁子)，“The Art of Lying and Fiction-Making in *Northanger Abbey*” Jane Austen Society of North America 事前審査有，2010.10.30，Portland，OR，USA

③武井暁子，「ジェイン・オースティンが書いたイギリス―再読で浮かび上がる変動の時代」，日本オースティン協会，2010.7.3，中京大学

〔図書〕（計 2 件）
①武井暁子、要田圭治、田中孝信編 音羽書房鶴見書店，『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』，2013，総頁数 272

②橋本槇矩、栂正行編、武井暁子他 鳳書房，『現代インド英語小説の世界―グローバリズムを超えて』，2011，77-94 頁

〔その他〕
ホームページ等
http://kenkyu-db.chukyo-u.ac.jp/show/main.php?c=8121

６．研究組織
(1)研究代表者
武井　暁子（TAKEI AKIKO）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：00403634

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：